平成２０年7月３１日
サンフランシスコ産業情報センター
駐在員　杉本安信

カルフォルニアにおける自動車産業の新たな動向
－新興電気自動車メーカーの事例から－

今年の6月30日、シュワルツネッガー・カルフォルニア州知事は、ある電気自動車製造会社を訪問。そこで電気自動車生産工場の州内での誘致が実現したことを発表しました。

州知事が訪問したこの会社が、３時間半の充電で２２７マイル（約３６０㎞）走る電気自動車を生産するテスラ・モーターズ（TESLA MOTORS）社でした。同社の「テスラ・ロードスター」は、環境にやさしい、という特性に加え、スポーツカーとしてのその斬新なデザインにより、現在、米国内で大きな注目を集めています。

カルフォルニア州から自動車生産工場が減り続けて久しくなる中で、今、新たな自動車産業の芽が出つつあるこの動きをとらえ、愛知県サンフランシスコ産業情報センターにおいても同社を訪問し、最高技術責任者(CTO)のJBストローベル氏とバッテリー担当責任者のカート・ケルティー氏に現在の状況や今後の戦略について取材をしましたのでご紹介します。

（ハリウッド俳優からも注目集める電気自動車－テスラ・ロードスター）

カリフォルニア州シリコンバレーに本社を置くテスラ・モーターズ社は、１００％電気で走る自動車をつくろうと志した技術者たちが２００３年に設立したベンチャー企業です。まだ創業まもないテスラ・モーターズ社ですが、２００８年7月現在、従業員数は２５０名に達しています。

同社は、２００６年にグローバル・グリーンＵＳＡより「環境リーダーシップ賞」を、２００７年7月にはビジネスウィーク誌と全米産業デザイン協会より「２００８年国際デザイン優秀賞金賞」を受賞するなど、米国内でも様々な賞を受賞し、その知名度は非常に高くなってきています。

テスラ・ロードスターとケルティー氏（本社研究施設内で）

このテスラ・モーターズ社が生産する電気自動車「テスラ・ロードスター」は、これまでの電気自動車のイメージを覆すスタイリッシュなデザインはもちろん、スタートから３．９秒で時速６０マイル（９７㎞）に達し、最高時速は１２５マイル（２００㎞）を誇る性能の高さからも、ハリウッド俳優をはじめ、ステータ

スや環境保護を意識する富裕層の心をとらえています。

同社のロードスターですが、実は、まだ一般ユーザーの運転で街中を走る姿を見ることはできません。今年５月にロサンゼルス市内に販売店の第１号店がオープンし、販売が開始されましたが、出荷は今年の秋以降となっています。しかし、１０万９,０００ドル（１,２００万円）という高価格にもかかわらず、販売が開始されて以降、予約が殺到し、すでに今年の販売分６００台は受け付けを終了するなど、大変な人気となっています。

（なぜシリコンバレーに自動車会社を設立したのか）

カルフォルニアには、かつてはゼネラルモーターズ社やフォード・モーター社の自動車工場をはじめ、８０年代までは、主要自動車メーカーの生産工場が多数立地していました。ところが、そうした工場が業績不振から次々と閉鎖され、現在では、主要自動車メーカーの中では、トヨタ自動車とゼネラルモーターズ社の合弁により１９８４年に設立されたニュー・ユナイテッド・モーター・マニュファクチュアリング社（NUMMI：New United Motor Manufacturing Inc.）のみが生産を続けている状況です。

そうした中で、新興のテスラ・モーターズ社はなぜシリコンバレーに自動車会社を設立したのでしょうか。この点について、最高技術責任者のJB ストローベル氏からは、「シリコンバレーには新興企業をサポートする大きな基盤、そして、新しいアイデアを理解して成長させようとする文化がある。わが社の本社では電気工学や機械工学の技術を必要としているので、シリコンバレーのほうが適した人材を集めやすい。」と説明していただきました。また、バッテリー担当責任者のカート・ケルティー氏からも、「カルフォルニアはわが社にとって一番大きな市場であり、売り上げの２５～５０％を占める重要な地域である。また、電気自動車を作るのは社員みんなの夢であるが、環境にやさしいことが大事だという意識の高い地域で売りたいと考えた。カルフォルニアはその場所である。」との説明がありました。

半導体産業、情報通信産業の一大集積地として世界的にも知られてきたシリコンバレーですが、現在では、様々な高度先端産業を受け入れる厚い産業基盤が形成され、また、新興企業のアイデアに対して積極的に資金提供する投資会社が多数拠点を置くなど、さまざまな新産業を生み出す環境と風土を備えた地域として存在感を増しています。この点、テスラ・モーターズ社のシリコンバレーでの成長は、カルフォルニア州における自動車産業の復活につながる一つの兆しとみることができるかもしれません。

（電気自動車製造へのカリフォルニア州政府の支援）

冒頭でも触れましたが、テスラ・モーターズ社がカルフォルニア州内に新たな生産工場を建設することになった背景として、カルフォルニア州政府の積極的な働きかけがあることは見逃せません。

同社はテスラ・ロードスターの次の製品となる５人乗り乗用車の生産工場の建設候補地として、当初、カルフォルニア州と隣接のニューメキシコ州のどちらを選択するか検討していました。こうした状況の中で、カルフォルニア州は、製造機器の使用、購入に対する税額控

除（９００万ドル）や従業員の教育・訓練支援金（最大１００万ドル）など、他州を上回る優遇措置をテスラ・モーターズ社に対して提示しました。今回の誘致合戦では、カルフォルニア州では、CO_2排出ゼロの自動車（Zero-Emission Vehicles：ZEVs)を製造する会社の生産活動に対して財政面での優遇措置を行う支援策を新たに打ち出し、テスラ・モーターズ社の建設地の選択にも重要な判断材料となり、同州内への建設につながりました。

６月３０日の誘致発表の場で、シュワルツネッガー知事は、「今日の声明は、カルフォルニア、そして私たちの経済、環境にとって素晴らしいニュースとなります。このような最先端企業にカルフォルニアでスタートを切ってもらうだけでなく、ここで研究を行い、成長してもらいたいのです。私は、いつも私たちの経済を守るのと同時に環境を守らないといけないということを言ってきました。そして、今日、そのために何をするべきかを世界に向けて実証したことがはっきりしました。」と述べました。

カルフォルニア州は、米国内でも環境政策への取り組みが最も進んでいる州として知られていますが、今回のテスラ・モーターズ社生産工場の誘致を通じて、その知名度をさらに高めるとともに、今後も環境先進地域として世界を牽引していくことを強く印象付けたと言えます。

（関心高まる電気自動車産業）

このように大きく注目される形でスタートを切ったテスラ・モーターズ社ですが、同社以外にも電気自動車の生産に取り組む新興企業が世界各地で増えてきており、また、ガソリン価格の低下も相まって、それらへの注目度も高まってきています。

しかしながら、そうした電気自動車への関心の高まりは、単にガソリン価格の高騰を背景とした一過性のものなのでしょうか。この点に関し、テスラー・モーターズ社のカート・ケルティー氏の説明では、「当社は充電には電池を使用している。過去１０年間で電池の価格は年平均６～８％下落してきており、性能面でも大きく進歩した。このことが電気自動車のより実用的なものに変えた。バッテリーの価格に影響するコバルトの価格は長期的には下がると見ており、バッテリーの価格も今後さらに下がるであろう。」とのことでしたが、電気自動車が近年、クローズアップされてきた背景と関連があるものと考えられます。

また、同氏から、「現在、日本製の電池を使用しているが、日本の電池は安定した性能、信頼性で世界一優れている。」との説明もありました。世界的な電気自動車開発の活発化の流れの中で、日本の電池メーカーの高い技術開発力を見逃すことはできないのかもしれません。

以上で述べたように、カルフォルニア州政府による環境にやさしい自動車の普及への先駆的な政策とカルフォルニアに本社を置くテスラ･モーターズ社の成長なども相まって､現在、カルフォルニア州は、自動車産業に関する世界でも有数の情報発信基地へと変貌しつつあります。そして、その状況は、カルフォルニア州の「電気自動車のデトロイト」への変貌、という言葉で形容されることも多くなってきています。

一方、愛知県も２００２年から「あいち新世紀自動車環境戦略」を打ち出し、環境にやさしい自動車の普及活動など、さまざまな施策を実施しています。この点、愛知県とカルフォルニア州は、それぞれ共通の課題認識を持ち、同じ目標を持って取り組みを進めている状況にあると言えるかもしれません。

今年１１月に名古屋市内で開催される「エコクリーンカーフェア」（主催：名古屋国際見本市委員会）には多数の米国企業の出展参加が見込まれており、最近の米国企業の環境への関心の高まりを窺い知ることができます。こうしたことから、愛知県サンフランシスコ産業情報センターにおいても、電気自動車をめぐる動向をはじめ、北米における自動車産業の環境変化について、今後も注視していきたいと思います。

テスラ・モーターズ社販売店第２号店（メンローパーク市）にて

テスラ・ロードスター車両後部の電池搭載の様子）

充電口の様子